

2025年度

S B

## 小論文

3月12日(水)

人文社会科学部 (言語文化学科)

10:00~11:30

【後期日程】

## 注意事項

## 試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

## 試験開始後

- 3 この問題冊子は、2ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあける。
- ・改行したら、最初の一マスをあける。
- ・句読点及び括弧等は、それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」等はそれぞれ一マスで使う。
- ・英数字は一マスに2文字入れてよい。

- 6 問題は、声を出して読むてはいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

## 試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章は、講話記録「やましき沈黙」と「パレーシア」からの抜粋です。文章を読み、あとの設問に答えなさい。

さて、もうひとつの言葉、「パレーシア」について急いでお話ししましょう。この言葉は、みなさんもよく知っているフランスの哲学者ミシェル・フーコーが、晩年に注目した概念です。フーコーは一九八四年、五七歳でエイズによって亡くなりましたが、一九八二年からの最後の三年間、コレージュ・ド・フランスでの講義で繰り返しこの言葉を取り上げています。

その入り口は「自己への配慮」というテーマでした。自分の財産とか地位とかではなく、「自分自身」を配慮する、「自分自身」を大切にするにはどうすればよいか、これをフーコーは古代ギリシア・ローマの文献のなかを探っていきます。そのために重要なもののひとつは「師」、私の「自分自身」を配慮してくれる先生であり、その「師」がパレーシアをもって語ってくれるということだ。「パレーシア」とは「すべてを語ること」「率直に語ること」であり、「言うべきことを言いたいときに言いたいように語ること」「真実を語ること」です。そうしてくれる先生をもつことが、自分自身を大切にするのに決定的だということです。

フーコーはパレーシアにはふたつの敵がある、といいます。ひとつは「追従」です。他の人、とくに地位が上の人に対して下の人が気に入りそうなことを言つて、恩恵や好意を勝ち取ろうとすることですね。パレーシアは「反(アンチ)追従」であり、相手が気に入ることではなく、自分が思っていることを語ります。もうひとつの敵は「弁論術(レトリック)」、つまり話す技術です。これは相手を説得して、自分が利益をあげるためのものです。これに対してパレーシアには「真理」そのものの伝達しがなく、話しかける相手が自分自身との関係をつくり直し、ほんとうの意味で自分自身を配慮できるようにすることを目的とします。そのように語ってくれる「師」がいることがほんとうに大切だ、というわけです。

そして、このことは「君主に対する率直さの問題」にもかかわってきます。誰が君主に率直に忠告をするか、誰が君主に真を語るることができるのか、という問題です。みなが君主に気に入られようとして率直にものが言えないとき、つまり「追従」し、「パレーシアがない」状態において、「人はあたかも奴隷のようになる」とフーコーはいいいます。「パレーシアを持たなくなった時から、主人の愚行に耐えなければならなくなる」、そして「狂人に合わせて狂い、愚かな人たちに合わせて愚かであること以上に辛いことはない」。これに対してパレーシアをもって語る「パレーシアスト」は「立ち上がり、立ち向かい」、「主人の愚行に対して真実を語り」、「主人の愚行を制限する」。フーコーは、「民主制が存在するためには、パレーシアが存在しなくてはならない」、逆に「パレーシアが存在するためには、民主制が存在しなくてはならない」と、「パレーシア」と「民主主義」の関係について述べています。

ただ、これがとても危険な行為であることはすぐにわかりますよね。フーコーは、パレーシアがあるのは「真実を言うこと・言ったことが、真実を言った人の身に大きな犠牲を引き起こすような条件において真実の語りがなされる場面」、「ほんとうのことを語ることが話し手に危険をもたらす場面」であ

る、と指摘します。だから、パレーシアストは「真実の語りが自分の存在を犠牲にすることになることを受け入れたうえで、ほんとうのことを語ろうとする者」であり、「ほんとうのことを語ることによって死ぬことを受け入れる者」である。私たちは、そうしたパレーシアストとして、真実を語り続けて殺されることになった、ソクラテスやイエスのことを思い出すことができるのではないかと思います。

〔出典〕奥村隆「やましき沈黙」と「パレーシア」(関西学院大学チャペルトーク二〇二二年六月)

[https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei\\_s\\_sociology/chapel/Talk2021/P20%E5%A5%A5%E6%9D%91.pdf](https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_s_sociology/chapel/Talk2021/P20%E5%A5%A5%E6%9D%91.pdf)

問一 筆者はこの講話の中で、本文章のタイトルにある「やましき沈黙」について、「間違っていると一人一人は心の中で思っている、組織がその方向に進むと口に出すことはできず、組織の空気に飲み込まれて、自分の意思ではない方向に流されていく」と説明しています。「やましき沈黙」と「パレーシア」がどのような関係にあるか、本文の内容を踏まえて説明しなさい(四〇〇字以内)。(配点五〇%)

問二 「パレーシア」が重要になる局面はどのようなものか、歴史やあなた自身の経験、あるいは文学・演劇・映画・漫画・アニメ・ゲームなどから例を挙げ、どのような「パレーシア」の実践がなされ得るか、論じなさい(四〇〇字以内)。(配点五〇%)